

眞妻大明神御祝詞

眞妻大明神御祝詞

謹上さい弊さい拜 敬白年号ハ今月今日月乃な羅びハと月に余
り同神乃御位ハ三百五十余の日良辰を撰み定て里らミやうが時
を以敬白

第日本國王城与南紀洲日高野郡川上野庄取里け三ツ野川に後を
た連ましま寿 こうどのごせんといわはれ給ふ 然るに以而取
乃大寿志んといわ玉れ給ふ 西乃海かい里う王乃おしませ給ふ
うゑのあら塩をかきわけて中乃眞塩を汲あげてやけ七ちんを清
め申ス 白妙乃御弊を捧げてこがねの心は花よね 色くくの相
ん御供をそなゑ申ス 仰ぎ願はくハ玉乃御宝殿あゆみをはこび
志を申ス 今日乃災難さいけつ衆生野迷ひを千里の原へ拂給ふ
眞妻大明神と申ス 御本地ハ不動明王まのびろ志やな 大日如

来とあらはれ給ふ 遠き人ハ聞てうらみ ちかき人ハ見てう羅
屋み 御悦のついでに貴ミのあしたハ きん里ん志やう 玉天
長地久國安圓滿 殊にハ牛馬六畜に至迄 災難なくし 大風洪
水ふもんきやう みやうねがいのことく 福くハ長者乃ごと
し とうみ志やう野御悦乃須るにハ 地頭領家両方乃 御司公
もん惣請い[?] 番頭名主たみん百姓に至迄 夜乃驚きのう ひる
野さ王きなく かむりのこしをかたむけて 心眼あざかに 忽
ミをふくませ給ふ 大氏子小氏子乃申事を 一々に成就円満せ
しめ給い さいはいくと敬白

天久^文十九年

十月吉日

眞妻大明神御祝詞

謹上さい弊　さい拝　敬白

年号は今月今日　月のならびは　と(十つき)　月に余り　日の神の御位は三百五十余

ケ日　良辰を撰み定めて　りうみやう　が時を以　敬白

第(大)日本國王城より南紀州日高の郡川上の庄　取りわけ三ツ津川に跡をたれま

します　(光土)こつどの(御前)ごせんといわはれ給ふ　然るに仍而所の大すじんといわは(祝)

れ給う　西の海　かいりう王のおしませ給ふ　うゑのあら塩をかきわけて

中の眞塩を汲みあげて　やけ七ちん???を清め申ス　白妙の御弊を捧げて　こが

ねの心(御)はなよね　色々のおん供をそなる申ス　玉の御宝殿あゆみをはこび志

を申ス　今日の災難災さいげつ薬　衆生の迷ひを千里ヶ原へ拂給ふ　眞妻大明神

と申ス 御本地は不動明王まかびろしやな大日如来とあらはれ給ふ 遠き人

は聞てうらやみ ちかき人は見てうらやみ 御悦のついでに 貴みのあした

にはきんりんじやう王(ゆ) 天長地久國安圓満 殊には牛馬六畜に至る迄災難

なくし 大風洪水ふもんきようみようねがいのごとく 福くはしゆだつ長者

のごとし とうみしやうの御悦のするには 地頭・領家両方の御司つかさ くもん(公文)

惣つい番ばんがしら 頭・名主・たみん・百姓に至る迄 夜の驚きの(ナク) う ひるのさわ

ぎなく かむりのこしをかたむけて 心眼あざやかにゑみをふくませ給ふ

大氏子・小氏子の申モウシゴト 事を一一に成就圓満せしめ給ふ さいは(再拜)いくと

敬 白

天文十九（一五五〇）年

十月吉日

原本表紙共六枚綴 上質料紙 墨書御蒙(?家)流風に近し

表紙楷書 本文草行混筆 平仮名変体仮名文字

一九六一・一・二二 轉写(高野記)

山野小字三津野川

東 李一氏 藏

眞妻大明神御祝詞の活字化を終わって

此の写本には父のコメントは何も書かれていない 末尾の記載によると川
辺町三津ノ川東李一氏(元川辺町文化財保護審議委員)所蔵を父の友人印南町の
高野光勇氏が写したものと思う 眞妻大明神は 丹生八幡宮に合祀された
のことで 天文十九(一五五〇)年の祝詞文と 現在の読み下し文を記さ
れている

平成十七(二〇〇五)年三月五日

清水 章博